

森信三の『日本文化論』（2）

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : “The Theory of Japanese Culture”
by Nobuzoh Mori (2)

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第72号 抜刷

2015年12月

森信三の『日本文化論』(2)

山 田 修 平¹

Shuhei YAMADA: "The Theory of Japanese Culture"

by Nobuzoh Mori (2)

戦後70年、終戦直後の全土が荒廃した状態から、経済的には高度経済成長、低成長、バブル経済とその崩壊、安定成長を経つつ、産業構造的には第1次産業から第2次産業、そして第3次産業へ就労のウェイトを移し、都市部、とりわけ東京に人口は集中した。また女性の社会進出が進み、核家族化、さらには単身家族化の進行、関連して少子高齢化社会の進展、人口減少が生じている。またIT技術の急速な進展とも大きく関連しグローバル化が進んでいる。既成の社会構造のみならず、その基底にある文化価値が揺らぎ見失われつつある。わが国の今後の方向は、どのようなべきか。今から50年前に著された森信三の『日本文化論』¹⁾を紐解きながら、考察する。

キーワード：森信三 日本文化論 島国性 原始流動性 第一の開国と第二の開国 東西文化の融合

はじめに

前稿²⁾において、森の略歴、主要著書を紹介した上で、『日本文化論』の特徴と構成を示し、1章から10章のうち8章までを論述した。

森は、自身の日本文化の研究方法は「哲学的考察」だとして、「国初以来、われらの民族のあゆみを通して生きかつはたいて、現在に及んでいる民族生命の自己実現」の「体系的実証」³⁾とする。

日本文化の特徴は「自己に固有な教学体系を持たなかった為に、民族生命の未限定的な原始流動が、いつまでも止むことなく、それは現在もなおその枯渇を見るに至っていない点」である。その上で本書の特徴は、「わが国の島国性の力説」⁴⁾にあると自ら立場を明らかにする。そして1章から8章で民族生命の原始流動性・未限定的受容性を起因とした外来文化の受容と溶解、モンスーン型風土の影響、心情的文化、求心性志向の文化、縦型文化、美の日常

的具現と日本文化の基底にある本流をさまざまな具体例や日常生活の特徴を示しつつ、論及する⁵⁾。

本稿では、先ず9章 第一の開国と第二の開国、10章 日本文化の将来と民族の使命を論述した上で、森の日本文化論を踏まえつつ、戦後70年、現在の日本また世界の状況の中で、わが国の向かうべき方向を考察する。

1. 第一の開国と第二の開国

この章で、森は第1章から第8章まで論述してきた要点を振り返り、日本文化は要素的に分解すると、固有のものは少ないが、外来文化の摂取と融化の仕方については、わが国風のものがないわけではないとして、例として道元・親鸞・日蓮という鎌倉仏教における三人の宗教的天才の根本的特質ともいえるべき「即身的世界観」を示す。そしてこの「即身性」は「実学」さらに表現の簡易性にも関連して道元の『正法眼蔵随聞記』、中江藤樹の『翁問答』、二宮尊徳の『夜話』等の一種の啓発的形態をとり、広く庶民にも浸透したが、その背景には、結局は「島国性」

1 鳥取短期大学

が考えられる⁶⁾とする。

その上で、第一の開国としての明治維新、第二の開国として「今次敗戦革命」を挙げ、その相違点と意義また特徴を述べる。

先ず森は、明治維新は「開国」という語が最も適切に当てはまるとし、わが国の「島国性」と「鎖国」を先行する重要因子として記す。このうち、特に「鎖国」ははるかに切実である。なぜなら「鎖国」のないところに開国の実感はないからだとする。そしてその「鎖国」を可能ならしめた現実的要因が、島国性だと説明する⁷⁾。

その上で、明治維新が可能であったのは内と外の「機」が一致した、いわば「天機」の到来⁸⁾とする。内の「機」とは、徳川時代三百年に及ぶ「鎖国」が外面的には一種の文化的遮断をもたらしたが、むしろ移入以来千有余年に及ぶ異質的文化としての儒仏の二大文化を渾融し、実学的教養として一般庶民階層まで浸透し、開国への基盤が形成されていた⁹⁾。外の「機」とはいわゆる外圧であり、幕末期、世界の「眼」はわが国に向けられ、武器をもった船に乗って迫り、開国を要請した¹⁰⁾のである。

こうして開国を実現した明治維新であるが、これを「文化」という視点からとらえると、その根源的なエネルギーとなったのは、「かかる即身の実学ではなくして、じつに民族に本具なる原初の神道的世界観」、「民族生命の未限定的な原始流動」である。かつて仏教、また儒教等常に外来文化の摂取に際して、その根源力として作用して来たものである。それは、「もともと一種の幽流として、民族の基盤を支えている」ものゆえ、神祇院の設置等の一時期を除いて表面に現れず、外来文化の摂取の大用に貢献してきた¹¹⁾という。

続いて森は「第二の開国」として「今次敗戦革命」¹²⁾を挙げる。そして「第一の開国」としての明治維新は、「一おう民族主体の変革」であったのに対して、「第二の開国」は徹底的な敗戦の結果として、無条件降伏下に占領軍の手によって行なわれた「徹底的な非主体の変革」である。その結果から言って

も、「天地のひらき」が生ずべきであり、現に然かいうべき面もある。しかし20年経た今日静かにその経過について考えると、必ずしもそうとは言いきれない面がある¹³⁾として、その理由を次のように述べる。

第一の開国・明治維新は、民族の主体的改革である以上、その意義が大きい。とはいえ、第一の開国では封建的なものが「その半ば近くは打破できなかった」が、第二の開国においては、占領軍は旧軍隊の徹底的解体、その後の真空の中に「民主主義」の理念を充填しようとした。これは、「絶対的敗戦」だからこそ可能であったのだとその意義を認める¹⁴⁾。そして具体的なさまざまな戦後の変革のうち、主要な改革として婦人参政権、農地改革そして新憲法の制定を挙げる。ただ農地改革は、戦争中から当時の農林省が取り組んでいたとして必ずしも非主体的な変革ではないという見解がある¹⁵⁾ことも述べている。その趣旨を明白にした最大の改革は、明らかに米占領軍当局から示され成案となった新憲法であり、その中心をなすものは、第九条の不戦規定に存する。「アメリカ側がこの条項を強制したのは、いうまでもなくわが国の軍隊を徹底的に解体して、二度と再びわが軍によって煩わされることのないようにとの、根本的な敵本主義」であったことは「自明の事柄」である。しかるに「今やベトナム戦争に手を焼いている米国」は「わが国の自衛隊の援助を望みたいにも拘らず、二十年前彼れが我れに強制したこの不戦憲法が、それを妨げているわけである」¹⁶⁾と押し付けられ、非主体的であった変革を「さまで悲しむほどのことではなく、むしろ『こうした事でもなければ、民族の積弊は改まらなかったであろう』と「民族の根本的宿弊に対する浄化作用」に「今次敗戦革命の有する特異な意義」があった¹⁷⁾とする。

また「天皇の在り方」についても、敗戦革命の「奇跡」的意義として、次のように記す。「わが国の天皇位は歴史上、民族の虚中心だった時期が大部分」であったが、明治憲法によって「絶対神聖にして不可侵とせられ、一国の元首の地位を確保」した¹⁸⁾。

今次の新憲法では、「周知のように、天皇を以って日本国家及び日本国民統合の象徴」として規定したが、「この点も新憲法の草案者の意図としては、これによって天皇を中心とするわが国の軍国主義化に對して、根本的な根切りを意図したわけであろう」。不本意で、非主体的な経緯で制定された憲法にしろ、結果として「われわれにとっては、むしろ明治以後天皇制が一種の擬似宗教化しようとしたその迷霧を吹き払って、民族本来の虚中心位に置かれる」ことになり、「民族のためにも、はたまた天皇御自身のためにも、むしろ喜ぶべきこと」¹⁹⁾、「なまじいに民族主体の変革だったとしたら、ここまでは為し得なかった」、「徹底した変革が遂行せられた」として、「現代における一つの『奇蹟』をみる思いがする」²⁰⁾と述べる。

さらに森は、第一の開国・明治維新が「まったく自主的主体的な行動」だったのに対して、第二の開国は、今次の徹底敗戦による占領軍による改革であり、「まさに正逆」、「天地を距てるほどの差」があるが、「いずれも不可避免的な意味を有する点では、共に相通ずるものがある」、「『反対の一致』ともいふべき趣」がある²¹⁾と記す。

その上で、森が本書を執筆した戦後20年経た昭和40年時点で次のような警鐘を鳴らす。「建国記念日を、敗戦の記念日たる8月15日にすべしというのが如き」、「第二の開国の教訓過剰のゆえに生じつつある『自卑』的態度より覚めて、新たな前進の一步を踏み出すべき時期」である。そのためには「民族自体の自主的主体的決断による」「第一の開国の意義に返照するの要がある」²²⁾。そうしなければ「徹底的に非主体の受容的だった第二の改革の立場からは、真に創造的な新たな前進を開始することは不可能」だ²³⁾と述べる。要は、第二の開国の意義を認めつつも、戦後20年の反省を経て、わが国のこれからの方向付けを主体的に決めるために、民族生命に宿る根源的エネルギーによる第一の開国の意義をしっかりと踏まえないといけないとする。おりしも「戦後20年と明治100年との奇しき暗号」の年で

あり「そこにある意味では『天意』を観る²⁴⁾」という。

2. 日本文化の将来と民族の使命

森は最終章にあたる10章で、9章までを振り返りながら、本書で意図したのは「民族の根底をつらぬいて無窮に流れる、民族の根源生命の有するもろもろの様相であり、その特質の究明」であり、「一応の概観を了った現在」、「われわれの関心が、今やその未来的展望に向けられる」²⁵⁾と論を展開する。

この場合「真の未来は、放っておいても現在になるようなものではなくて、われわれ人間が至心に意図して形成し、さらには創造しなければならぬ」。しかも「それが日本文化に関わるかぎり、これを形成し創造するものは、単なる人間一般というものではなくて、われわれ日本民族であり」、「われらが主体」とならなければならない²⁶⁾とする。また「形成と言ひ創造という以上」、「それだけの意図と展望とがなければならぬ」、いわば「意図的展望の問題だ」²⁷⁾とこの章の趣意を明らかにする。

その上で、「日本民族に課せられた、おそらくは唯一にして、かつ最大の使命」は、「人類がその遙かなる未来において、何時かは成就するであろう処の、東西文化の融合という究極的な目標に對して、一つの縮図を提供することによって、ある意味ではその『橋掛け』をすること」²⁸⁾と方向を提示する。その理由として次のように述べる。

「世界は1つ」ということ、あるいは1つでなければならないということが、2回にわたる世界大戦で「人類によって次第に認識せられ」てきた。「第1次大戦は、まだどこかヨーロッパ戦争ともいうべき趣があった」が、第2次大戦は「わが国が参加することによって」、「実質的にも世界大戦たることを決定したとして言うてよい」²⁹⁾。同時に、2回の世界大戦で「ヨーロッパ諸国民に對して、一種衰退の兆を与え」、絶対と考えられてきた「ヨーロッパ文明そのものの持っているその相対性が、徐々ながらも問題になりかけて来た」³⁰⁾。とはいえ、この自覚は、

日本人以外の「東洋人の間には、まだ起きてはいない」。なぜなら「インドはまだその極度の貧困の中に埋没しており」、中国は「自然科学文明の急激な向上を意図して、同じ西洋文明の一所産であるマルクス主義に対して、国を挙げて没頭しつつあるが故である。」このような状況だから、「西洋文明の前途に対する反省は、心ある一部のヨーロッパ人自身」と我われ日本人の中に「兆しそめつつある程度」であるが³¹⁾、「東西文化の歩み寄り」こそ、人類の前途に求められることである。そして「そこに多少なりとも示唆を与えるものがあるとしたら、それは結局我らの民族ではないか」³²⁾として、次のように述べる。

「われらの民族は、世界の有色人種の間であって、高度に西洋文明を消化した最初の民族」であり、「今後の東西文明の歩み寄りに対して、いわばその水先案内的な役割」ができるからである。その役割を果たすには、2つの文明を同程度に消化していることを要するが、わが国はまさにそれを果たしてきたからだ³³⁾という。

そして具体的に、「東洋文化のうち、その2大典型というべき仏教と儒教」を取りあげ、「仏教はその生誕の地たる印度では遠く亡び」去り、中国においても「マルクス・レーニン主義を奉じているため」、仏教はもとより、「いわば国教ともいうべき儒教及び老荘の教えが、根本的に否定せられつつある」³⁴⁾。他方わが国においては、仏教と儒教は「遠く1千年以上も以前からわが国に流入し、その永き歴史的努力を通して、われらの民族に融化」し、「現在なおその精神の多少なりとも生き残りつつある」³⁵⁾。また「世界の有色人種中」「最も早く西洋文化を摂取し、今や西欧の先進国に対しても、さまで遜色なきまでの高度生産体制に達している」³⁶⁾。加えて「われらの民族が、象形文字と音標文字とを共に解しうる、地上唯一の民族だという一事によっても、証せられる」³⁷⁾という。

ただ心すべきは東西文化の融合を過大に誇負したばかりに、「あの大東亜戦争を起こして、あえなく

も敗れ去った事実を忘れてはならぬ」。「戦前におけるような手放しの、ないし独善的な自己肯定ではなく」、「東西文明のあゆみ寄りに対して1つの掛け橋」、あるいは「両文明の融合に対して、1つの縮図的見本を提供」することである。そして「この大任」を果たすことが、国土の位置、民族の歩み等の諸条件からみて、「民族の人為によるものではなく」、「いわば『天』より与えられた」使命だ³⁸⁾とする。

しかし現状は、「資本主義的なアメリカ文明と、共産主義を奉ずる中ソ的なものが氾濫し」、「氾濫錯雑」して、「何らの統一も見られ」ない。人によっては「わが国の文化は一種の『雑種文化』に過ぎない」とさえいう³⁹⁾。ただ森は、この状況は統一までの過程の「不可避の理」としてとらえる。とはいえ、そのまま放置しておいては、調和的統一は望むべくもない。必要なのは「結局は民族としての主体性の確立という他ない」。しかし個人でさえ主体性の確立は難しいのに、「無量の個人を容れている民族の主体的確立」は容易ではない。特に「事が文化の問題」であるので、政治のような「単なる一挙の決断」によって可能な問題などとは、根本的にその性質を異にする」と述べ、結局は「民族全体の自覚に待つ他ない事柄」である⁴⁰⁾とする。続けて「自覚に待つ他ない」としつつも、「心ある人々は、民族文化の向上、特に東西文化のあゆみ寄り」に対して、自覚的に常に努力をする必要があると、次の3つの要点⁴¹⁾を示す。

先ず「西洋文化への関心と、その摂取への努力を怠ら」ないことを強調する。その理由として東洋文化は我々にとって「自己の体に根ざし」ているが、西洋文化は「全く異質的なもの」だけに「自覚的な努力」が必要だとする。次に「文化が根本的には、広義における『生活文化』」であり、「大衆を基盤」とするものであることを銘記することである。このことを忘れると「東西文化の統一融合への縮図」づくりという「民族の使命」も観念的となり、「一部の特権階層の玩弄物の域」に留まる。ただ「基盤を大衆におくという場合」、「当初の間、一種の低俗さ

を免れ」ない。「現にわが国現下の文化的混乱」も「かかる段階にあると言うべきか知れない」。「それはやがては、第三の、しかも根本的条件としての民族主体の確立によって、徐々にその弊を克服」していける。現状は、まさにそのような「民族としての主体性の確立の前夜」である⁴²⁾。この眼前の「雑種文化」的現状に対して、「結局は心ある人々の間に、それぞれ民族主体が確立せられる他ない」が、「『急がば廻れ』の諺のように、一人々々がまず自ら主体的に自立すると共に、周囲の人々との間にも、心の共感を求め合うところから出直す他ない」⁴³⁾と記す。

同時にまた、この現実の世界にあっては、「時勢」という言葉に端的に表されるように「勢」がある。

「自己の為すべきを為した上は、すべてを『天』に委せ」る態度が必要だ⁴⁴⁾と語る。

明治維新以降 100 年を振り返り「根本的に異質的だった西洋の自然科学的文明を、とにかく先進諸国並に、ほぼ雁行する処まで辿りつくための努力」をしたが、結局「かれへの模倣」であった。「可成りな程度の充実に達した時、それを以って十分と錯覚して犯した誤り」が「今次敗戦」である⁴⁵⁾。そして今「戦後 20 年」。「敗戦の痛打に対して、ようやくその主体的反省を可能とするだけの、心のゆとりを取り戻した時期」である。「ボツボツ独創的なもの」を「生まねばならぬ」また「生まれるだろう」⁴⁶⁾と述べる。

続けて、「真の独創」とは、個人であっても、民族であっても、「自らの主体を確立せずしては、不可能」である。「何となれば模倣と独創」は「すぐれて態度の問題だからである」。「しかも顧みて、これまで民族の全歴史的なあゆみ」は「何ら民族に固有と言いうるほどの文化を持たなかった」。今こそ「真の独創的なあゆみに転じようとする時」ではないかと問いかける⁴⁷⁾。

わが民族は長い歴史を持つが、その歴史の長さによって否定されない「若さ」がある。その「終局的根拠」は結局「民族の根源的生命の原始流動」が「自らの教学体系を積極的に限定しなかった」からであ

る⁴⁸⁾。そして「若さ」また「若返り作用」の根本要因は、わが国の「島国性」にある。なぜなら「島国性」は「自然的限定にもとづく一種の自閉的円環」であり、外部的世界との遮断により「生命の凝固を来たす因ともなる」。だが同時に、外来文化と接すると「新鮮極まりなき刺激」それ以上に「巨大なる衝撃」となる⁴⁹⁾。

加えて「若さ」の要因に毎年のように襲来する台風、それに伴う洪水、また数年毎に各地に起こる地震等の天災を挙げる⁵⁰⁾。こうした天災は、「自然科学の力を以ってしても、それは容易に防ぎうる性質のもの」ではなく、多くの被害をもたらす。その結果、毎年のように「つねに原初に近い『無』からの建設」を余儀なくされる。ここに永遠の「若返り」の 1 つの秘密があり、民族に与えられた「一種の深意」がある⁵¹⁾とさえ述べる。

最後に森は、首都東京の『奠都論』を提案する。東京は余り膨大になりすぎ「脳溢血症状」を呈し、これに反して地方はまさに「脳貧血状態」に陥っている。この「根本的な病患を放置」しておいては、いかなる方策を講じても、結局は「徒労」になる。何故なら、民族生命の若返りに対して「最大にして最深の痛」は東京一極集中にあるからである⁵²⁾。空前の独裁政権というべき徳川幕府から数えれば、350 年以上、江戸・東京が権力の集中地なのである。世界史的に考えても「まさに『大變』の行なわれるべき『天の時』」である⁵³⁾。

ただ現実的には東京の全体を移転するのではなく、さし当たっては、政府諸機関、皇居そして大学の 3 つでよく、移転先は、「霊峯不二を背景とする富士山麓が良いであろう」と具体的に提示し、明治 100 年の記念する事業としては、この「奠都」あるのみ⁵⁴⁾だと本書を締めくくる。

3. 『日本文化論』の特徴と要約

以上 2 回にわたって森の『日本文化論』をできる限り、忠実に論及してきた。わが国の「島国性」を

基底に、体系的哲学的視点から、民族の自己実現の過程としてとらえた『日本文化論』は何千年に及ぶ民族の思考、行動形態を把握して、巨視的であると共に、その裏づけに我々の日常生活にもしっかり目配りをした具体的視点をもつものである。核にあるのは、「島国性」を基底に置き、民族生命の原始流動性、未限定的受容性を起因とした外来文化の受容と溶融である。

本稿で示したように、森は9章で第一の開国として明治維新を、第二の開国として敗戦による開国を挙げる。明治維新は主体的開国による改革であるのに対して、敗戦による開国と占領軍による改革は、「天地の隔たりがある」としつつも、両開国共に「天意」を感じるとする。そして各改革に外来文化の受容と溶融に民族生命の原始流動性が働いていることを示す。

その上で、最終10章で今後のわが民族の国家的使命は、永き歴史や文化的特徴から「東西文化の融合のモデル」あるいは「東西文化の掛け橋」になることだといひ、そろそろ「模倣」から「真の独創」の時にすべきだと記す。そのためにわが民族固有の「若返り」が必要だとして、硬直した東京一極集中から脱するための「奠都」を提案する。

4. 『日本文化論』から現代日本を考える

森が「日本文化論」を著してから、さらに50年が経った。この50年、経済的にみれば高度経済成長から低成長、安定成長をくり返しながら、生活水準を向上させ維持しつつ進んできた。その間に日本経済発展の原動力の1つと指摘されていた終身雇用、年功序列を核とする日本的経営は大きく変容した。またIT化の加速度的発展に伴い、モノ、人、情報が国境を超え、行き交うグローバリゼーションの時代となった。このIT化とグローバル化は国家間関係、企業活動だけではなく人々の日常生活にも大きな影響を及ぼすようになってきた。コミュニケーションの手段は、メール、スマートフォンが主

流となり、face to face の「生」の人間関係は希薄となった。また国の感覚は、オリンピックのようなスポーツの国際大会以外、日常的には感じることは少なくなった。

社会的には高齢化、さらに少子化が進み、人口減少時代に突入した。関連して家族構成は拡大家族の時代は遠く過ぎ去り、核家族、さらに単身家族が主流の時代となりつつある。そして森が危惧した如く、あるいはそれ以上に東京一極集中が進み、その是正のため地方創生の必要性が唱えられ出した。

幸い、戦後70年、『日本文化論』以降50年、わが国は直接的には戦争に巻き込まれることはなかった。しかし、国際的に目を投じれば、戦火は絶えず、ISに象徴されるような異文化を全く受け入れないがための紛争は絶えない。またわが国も無関係とはいえない事件が生起している。さらに隣国との摩擦も解消されていない。表面上は平和といいつつも、内実は火種を抱えている。こうした中で、わが国の方向をどのように考えるべきだろうか。

森は、「東西文化の融合」を提案したが、その前提に西洋文明の象徴というべき自然科学への対応を考えなければならない。西欧において自然科学が生まれてきた事実の背後には、キリスト教があることは、森だけではなく多くの識者⁵⁵⁾が指摘する通りである。「この世は神が創り賜うたのだから、それは単純にして明快な法則によって秩序だてられている」。「神と人間、人間と他の被造物の間に明確な切断」があり、「現象とその現象を観察する観察者の間に明確な切断がある」。だからこそ自然科学は「普遍的な法則」をうみだすことができた。ところが、自然科学は、人間が多くの法則を発見し、自然を相対的にコントロールすることが判明するにつれ、人間が神の座を乗っ取る勢いを持った⁵⁶⁾のである。いわば神なき後の自然科学の自律的發展である。

その結果、人間中心主義の効率性、便利性の追求は、人類に莫大な物質的な富をもたらしたが、他方、公害に象徴されるように多くの自然破壊をもたらしてきた。さらに究極として自然科学は原子力爆弾を

発明してしまった。問題は、自然科学固有の独自の発展法則と精神文化とのギャップにある。

原子力爆弾と軌を一にする原子力発電をどのようにとらえるのか、まさに人類に突きつけられた課題である。物質中心、人間中心主義から、自然との調和というわが国の叡智が求められるときであろう。福島原発事故からの教訓を生かさねばならない。自然と共存できるエネルギーへ大きく舵を切り替えることが求められる。わが国が主導するときである。

おそらく森が予測していなかった自然科学文明の象徴的な発展は、IT化である。この波は、間違いなくさらに広がり、続くであろう。IT化は、瞬時の情報のやりとり、情報の共有、情報網の拡大とその利点は多々ある。他方人間関係を大きく変質させ、社会のあり方を大きく変貌させる要素をもっている。大切なのは、我々自身が主体的に得べき情報と必要としない情報を選択することである。それ以前に、現代文明としてIT機器を何時用い、何時用いないかという「主体的態度」を持つことであろう。

教育からのアプローチを示すならば、理系と文系といったわけ方を早い段階から行なわないことである。自然科学と人間の生き方を複眼的に考える若者をしっかり育成する必要がある。また個人の姿勢から述べれば、迂遠のようだが、「禅」の教えにも通じる、森のいう「立腰」であろう。「立腰」は物事を主体的に判断し、行動する決め手である。なぜなら心身は不可分だからである。

グローバリゼーション時代の生き方が問われる。留学、観光、企業活動、文化活動等国家の枠組みを越え、人々は交流し、移住する。また政治的軋轢で難民問題も生じている。おそらくグローバルな文化が形成されていくであろう。ただその土台に、ローカルな文化がなければ、真のグローバルな文化は育たない。人は足元をしっかりと固めなければ、根無し草的な生き方になる。真にグローバルな生き方は、ローカルな生き方の上にはじめて成り立つ。そのために必要なことは、自国の文化を学ぶと共に、多様性を認める態度を培うことである。森の言う原始流

動性であり、異文化の融解が発揮されるときである。

国内的にも同様なことがいえる。現在時代のキーワードとなっている「地方創生」の意図は、森の言葉を用うるならば、わが国の「若返り」のためには東京一極集中化を正し、地方を活性化することによって始めて可能だということであろう。森の提案した大胆な「奠都」の方向は未だ示されず、論議もされていないが、出来ることから一步を踏み出したい。

地方創生のテーマは「まち、人、仕事」である。少子高齢化の時代、子を生み、育くむよりよい環境の創出は、地方にこそ可能である。地方の生活に根付いた味わい深い文化と豊かな自然をアピールすると共に、住まい、憩いと活動の場、交通等の環境を一層整備したい。そして行き詰る都会の中高齢者の地方移住の促進を図りたい。人が集まるところに仕事はできる。若者の雇用の場も開拓できよう。また地方創生のリーダーとして、地方の大学への期待は大きい。知の拠点、文化の伝承と創造、人材の育成、生涯学習の場等、なすべきことは多い。

戦後70年、森亡き後50年、森の提示した「東西融合のモデル」、「東西文化の掛け橋」、「奠都」への道は遠い。しかし、「一眼は遠く歴史の彼方を、そして一眼は脚下の実践へ」⁵⁷⁾と大局を見失わず、地域として、また個人としての精神の弾力性を失わず、いま在るところから、いまできることから始めたい。地方創生の歩みが、国としての若返りとなり、「東西文化の掛け橋」という使命を果たす道筋ともなることを期待したい。

注

- 1) 森信三「日本文化論」、『森信三全集第五巻』、実践社、昭和42年。
- 2) 山田修平「森信三の『日本文化論』(1)」、『鳥取短期大学研究紀要』第71号(2015年6月)、pp. 1-9.
- 3) 前掲、「日本文化論」、p. 291.
- 4) 同上、p. 291.
- 5) 前掲、「森信三の『日本文化論』(1)」、p. 8参照。

- 6) 前掲, 「日本文化論」, pp. 514-519 参照.
- 7) 同上, p. 523 参照.
- 8) 同上, p. 523.
- 9) 同上, p. 522 参照.
- 10) 同上, pp. 522-523 参照.
- 11) 同上, pp. 526-527 参照.
- 12) 同上, p. 527.
- 13) 同上, p. 528 参照.
- 14) 同上, pp. 528-529 参照.
- 15) 同上, pp. 530-531 参照.
- 16) 同上, p. 531.
- 17) 同上, p. 531.
- 18) 同上, p. 531.
- 19) 同上, p. 532.
- 20) 同上, p. 532.
- 21) 同上, p. 532.
- 22) 同上, pp. 534-535 参照.
- 23) 同上, p. 535.
- 24) 同上, pp. 535-536.
- 25) 同上, p. 540.
- 26) 同上, p. 540 参照.
- 27) 同上, pp. 540-541 参照.
- 28) 同上, p. 541.
- 29) 同上, pp. 541-542.
- 30) 同上, p. 542.
- 31) 同上, p. 542.
- 32) 同上, p. 543.
- 33) 同上, p. 543.
- 34) 同上, pp. 543-544.
- 35) 同上, pp. 543-544.
- 36) 同上, p. 544.
- 37) 同上, p. 544.
- 38) 同上, p. 544 参照.
- 39) 同上, p. 545 参照.
- 40) 同上, pp. 546-547 参照.
- 41) 同上, p. 548 参照.
- 42) 同上, p. 548.
- 43) 同上, p. 549.
- 44) 同上, p. 549 参照.
- 45) 同上, p. 551.
- 46) 同上, pp. 550-551.
- 47) 同上, p. 552 参照.
- 48) 同上, pp. 553-554 参照.
- 49) 同上, pp. 554-555 参照.
- 50) 同上, pp. 555-556 参照.
- 51) 同上, p. 556 参照.
- 52) 同上, p. 556 参照.
- 53) 同上, p. 557 参照.
- 54) 同上, p. 557 参照.
- 55) 河井隼雄, 1928 年生まれ, 京都大学名誉教授, 心理学者, 『河井隼雄著作集』(全 14 巻), 岩波書店, 1993 年等著書多数.
- 56) 河井隼雄『日本文化のゆくえ』, 岩波書店, 2000 年, pp. 117-119 参照.
- 57) 寺田清一編『森信三先生一日一語』, 実践人の家, 1991 年, p. 202.